

環境教育センター活動報告

②学生主体の環境教育プログラム立案・実践

担当 遠 藤 晃

環境教育センターでは、自然環境を活用し、学部や大学を越えた学びによる「知の総合化」を目指しています。そのため、学生が環境園芸学部、附属フィールドセンターや連携幼稚園など、多様な方々とコミュニケーションを取りながらプログラムを創りあげるプロセスを大切にしています。

学生たちは対話を重ねることで、農業、特別支援、学校、行政、地域など多様なステークホルダーの意見を子どもの教育に織り交ぜながら、目的と手法が一致したプログラムを創造し実践します。「我々はイベント屋ではない！学びの集団である！」を合い言葉に、今年度も様々な活動に取り組みました。

(1) 連携幼稚園の子どもたちが環境教育プログラムに参加

7月12日（金）

梅雨の合間の奇跡的な青空の下、連携幼稚園の園児たちが「掘ったイモはどんなイモ？：マリーゴールドの巻」に参加しました。このプログラムは環境園芸学部の協力の下、環境教育センターが主催したもので、本学科学生が主体となり、議論を重ねながらストーリーを創り上げ、入念な準備をしてこの日を迎えました。

消えたマリーゴールドの苗を探し出した園児たちは、イモが元気に育つようにとマリーゴールドの苗を畑に植えました。畑での一仕事を終えた子どもたちは、疲れも知らず、虫とり網を振りながらキャンパス内を走り回りトンボやチョウを追いかけます。楽しみながらも集中して大変な作業に没頭する子どもたちの姿に学生たちは「主体的で深い学び」のヒントを見つけたようです。



(2) 夏休み自由研究相談会を開催

8月17日（土）、18日（日）

小学生の親子を対象とした夏休み自由研究相談会（主催：環境教育センター、後援：都北の理科教育を考える会）を開催しました。この相談会の目的は、知識・技術を教えることなく、子ども達を問診して科学のプロセスを整理してあげることです。

相談会に参加した親子に対して、子ども教育学科と環境園芸学科の教員志望の学生たちは、知識を教えないよう考えながら、適確にアドバイスしていきます。例えば、実験に失敗して困ったと悩む保護者には、「こうすれば良い」ではなく、「失敗した背景を調べて原因と改善策を書けば、成功したときよりも面白い研究になる」というふうに。理科の本質が伝わるこのアドバイスに保護者は安堵したようで、この学生の対応には我々教員も学ぶべきものがありました。



(3) 連携幼稚園の園児たちと芋掘りをしました

11月1日(金)

秋晴れのもと、天竜祝吉幼稚園の園児たちを迎えて芋掘りをおこないました。学生たちが春に植えた、色も形もとりのりの6種類のサツマイモは、夏に子どもたちと一緒に畑にマリーゴールドを植え、消毒や農薬を使わないイモ作りにも挑戦しました。すくすくと育ったサツマイモに、子どもたちは歓声をあげながら、どんどんイモを掘り起こします。

このプログラムで学生たちが立てた課題は、主体的学びのベースとなる「子どもの没頭状態の創出」です。そのために、イモの蔓を切るか切らないか等、時間をかけて議論を重ねながらプログラムを練り上げていきました。その効果か、1時間ほどの間に子どもたちはすべてのイモを掘り尽くしてしまいました。



(4) 南九探究クラブ「科学実験教室 わくわくカラーワールド」を開催

12月1日(日)

「わくわくカラーワールド」(主催:理科教育研究室・環境教育センター、後援:都北の理科教育を考える会)を開催しました。

第一話では子どもたちは大学構内を探検しながら自分の好きな色の花や実、葉っぱを集めて様々な色水を創ります。第二話では創った色水をいろんな液体に混ぜて色の変化を調べます。劇的な色の変化には子どもだけでなく大人たちからも歓声があがり、ナゾのバーテンドーやミラクル焼きそば職人も現れ、笑いの絶えない実験教室となりました。プログラムで学生が目指したのは「探究」

に不可欠な「没頭状態の創出」です。ゆったりとした時間の中で集中して取り組む子どもたちの様子をみると、今回の作戦は大成功!のようです。



(5) 科学実験教室&自由研究大作戦 in 綾を開催

12月26日(木)

本学が連携協定を結ぶ綾町で「科学実験教室&自由研究大作戦」を開催しました。本プログラムは環境教育センターと理科教育研究室(遠藤ゼミ)が主催し、綾町教育委員会と都北の理科教育を考える会の後援を受けて実施しました。

会場となった「綾エコパークセンター」に集まった綾小学校の子どもたち。綾ほんものセンター(物産館)で購入した花や無農薬野菜、ハーブティーや特産の酢を使った地産地消の実験教室に、不思議を感じ、集中して実験に取り組んでいました。本教室の目的は子どもたちの科学への興味関心とスキルを高めることと同時に、教員を目指す学生たちの「探究」の指導力向上です。科学の楽しさは、子どもだけでなく、学生たちにも感じられたようです。

